

09

図像から考える日中欧の医学交流

江戸後期の状況を題材に

ヴィグル・マティアス

1 はじめに

允恭天皇3年(414年か)、天皇の病を治療するために新羅から金武が派遣された。その後、562年に呉出身の智聡が日本へと持ち込んだ『明堂図』(経絡関係の図)などの医書が、日本における日中韓の医学交流の最初期の記録となった(小曾戸, 1999: 87)。それ以降、直接的な交流ルートに加えて、第三国を経由するルートなど、医学が伝播する経路は多様なものとなった。とりわけ通信使や使節などの外交目的の集団旅、あるいは商人ネットワークに支えられた仏教教団ネットワークによる活発な活動によって、日中韓における「本」、「人」、「モノ」のダイナミックな医学交流が展開されることになったのである。

曲直瀬道三(1507-1594)¹⁾の生前、日本で刊行されていた医書は『医書大全』、『勿聴子俗解八十一難経』、『察病指南』のわずか3種類のみであり、中国または朝鮮から輸入された医学書がおもに写本として国内で流通していた。なお、平安時代から道三の時代までについては、中国医学書が輸入された正確な年代、数量に関する情報が乏しく、16世紀までの日本の医学書で引用された中国医学書がどのようなルートで入手されたのか、詳しくはわかっていない。

江戸時代になると、書物から新たな医学的知識が得られるようになった。17世紀から商業出版が発展したことにより、出版文化が本格的に普及することになった。そしてそれにともない、当時の人びとにとって医学関係の本が身近なものとなり、多様な読者層を対象とした様々な書籍が出版された。その一方で、医学書の出版が盛んになっても、写本というかたちで流通した医学書も少なくなかった。そして本

1) 16世紀に活躍した日本医学中興の祖といわれる人物。

章のテーマである図像の使用ということでは、平安時代の『医心方』、鎌倉時代の梶原性全『頓医抄』など、江戸時代以前の医学書には図像的な要素が散見されるが、ほとんどの書物は文字情報をベースとしていた。

しかし、17世紀後半になるとこの傾向に変化が生じた。この時代になると、経絡、ツボ、腹診・舌診、臓腑の位置、針灸用道具などについてしばしば図が使用され、書物のなかでそれが文字と自由に組み合わせられるようになった。このような医学書の図像化は漢方医学書のみに限った話ではない。1774年に『解体新書』が出版された後、オランダ医学に関する書物においてもそれは規範的になった。もちろん幕末までは、みずからの学派内で伝承されてきた知識を漏洩したり本に記したりしてはならないという、いわば「秘伝主義的」な考え方も残存していた。しかしそれもまた、医学知識を公共の世界に普及させようとする啓蒙的な考え方と共存していたのである。

管見では、江戸時代の医学における図像の役割について、作者もしくは読者の視点から検討する研究は少ない²⁾。しかし他方でそれを理解することは、当時の身体とテキストとイメージのあるべき関係を解明するために重要な課題だといえる。欧米における近世の自然科学史・技術史・医学史の分野では、非テキスト的で視覚的な要素に注目するものも少なくない。パラテキストとしてイラストレーションがテキストの解釈に影響することもあり、それゆえに、観察された植物・体内・技術などを表現するイラストレーションの役割や特徴などについて研究するものもある。たとえば近世医学については、アンドレアス・ヴェサリウスによる『人体の構造』(1642年)などに認められる言葉と図像の相互依存的な関係がすでに明らかにされている³⁾。また、ルネサンス後期から、ヨーロッパ社会における技術の普及を促進させるために、模式図・挿絵・グラフのついた技術書の出版が重要な役割を果たしたという事実が従来よく知られている(Ogilvie, 2003)。

漢方医学の場合にも、文字だけでは伝えにくい臨床知や暗黙知も存在するので、医学書にはイラストレーションが飾りとして単に添えられたものではなく、医学書の本質的な要素として、専門的な知識を伝える目的で活用されたのではないかと考

2) Whiteley (2018) が医学関係の図を、当時の読者の視点から考えるべきだと主張している。中国と日本の医学関係の図については、Lo (2018), Vigouroux (2019), Wolfgang (2010), Kuriyama (2001) などの研究がある。

3) Kusukawa (2012) の Part 3 を参照。

えられる。また、図像の役割として、言葉だけではイメージしにくいことを概略的に理解させることができる。たとえば、イメージで図解することによって、ツボの位置、五臓六腑の形と位置などを一目瞭然に示すことができる。

問題となるのは、イラストレーションのついた医学書・巻物を作成した当時の医師は、どのような表現を目的としたのだろうか、あるいは、イラストレーションに何を期待したのであろうか、という点である。また、実際のところ読者はどのようにイラストレーションを理解し、それを利用したのであろうか、という点も疑問である(文字とイラストレーションを関連づけながら書物を読んだのだろうか)。本章ではいくつかの例を取りあげながら、このような医学関連のイラストレーションをめぐる諸問題を明らかにしていきたい。

2 『飲食養生鑑』と『房事養生鑑』にみる視覚表現の変化

まず、大型の浮世絵(50×37cm)で、当時の人びとの間で評判になった『飲食養生鑑』と『房事養生鑑』を例としてあげてみたい⁴⁾。江戸時代後期の医学界を物語るこれら二つの錦絵についての研究は少なくないが、しかしそれらのほとんどは、絵の内容と系譜についての詳細な解説しか行っていない。つまりそれらについて、実際の読者の視点からどのような理解がなされたか、という点が明らかになっていないのである。先行研究の多くは、「当時の人々の身体観、養生観を解明するのが目的である」などと主張するが、しかしその時代に、どれほどの人がこのような身体観につづじていたのか疑問が残る(畑, 2015: 124)⁵⁾。

『飲食養生鑑』は酒を飲む男性の身体内を描きながら、飲みすぎと食べすぎを戒める。これに対して『房事養生鑑』(図9-1, 図9-2)は体内を遊郭の世界にたとえ、女性特有の体内を描きながら、房事の摂生を説いている。男性や女性の身体のまわりで臓腑などの解説がなされ、体内には臓器の動きを擬人化した小人と、彼らの台詞

4) この二つの錦絵は味の素食の文化センター、内藤記念くすり博物館、国際日本文化研究センター宗田文庫、イェール大学クッシング医学図書館ライコレクション、カリフォルニア大学サンフランシスコ校スペシャルコレクションなどに所蔵されている。本研究では、オンラインで公開されている国際日本文化研究センター宗田文庫所蔵の『房事養生鑑』を使った(<https://lapis.nichibun.ac.jp/sod/Detail?sid=1-30&eid=01> (最終閲覧日: 2021年1月15日))。

5) 『房事養生鑑』について、他には酒井(1999)、白杉(2006)といった研究がある。

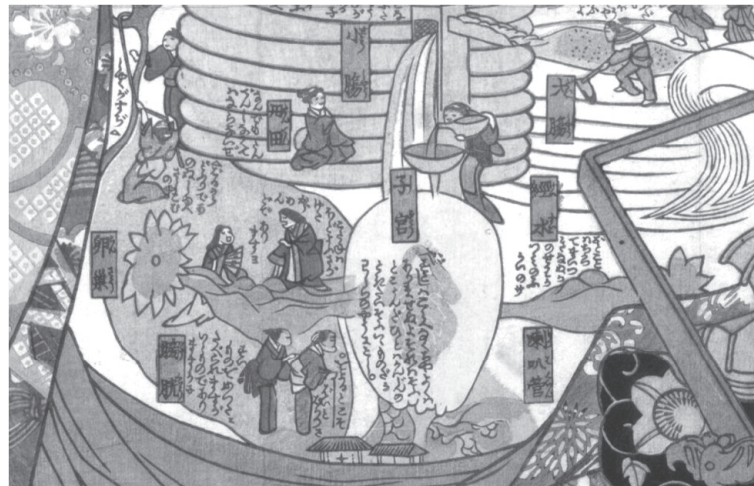


図 9-1 『房事養生鑑』(一部) (国際日本文化研究センター図書館蔵)



図 9-2 『房事養生鑑』(全体) (国際日本文化研究センター図書館蔵)

が描かれている。絵についての解説は、江戸時代に流行していた五臓六腑説にしたがっている。

たとえば『飲食養生鑑』(1712)では、心臓については「心ハ、火にぞくし、いろ赤し。舌、くちをつかさどる也(略)」などと書かれているが、それは陰陽五行説に依拠するものであり、当時の医学書や『和漢三才図会』などの類書でよくみかける説明文がほぼそのまま引用されている。真面目な解説文と比べ、小人の台詞は俗語で娯楽的に書かれているようでもあり、体外と体内の文章は対照的な雰囲気である。

興味深いのは、男性と女性の体内において、臓器の働きを小人たちのそれに見立てている点である。白杉悦雄が述べたように、その当時、身体を日常生活空間(家中・町中)で会う人に見立てることは、遊女の体内を商家に見立てる『十四傾城腹之内』(1793)にまで遡ることができる(白杉, 2006)。また、身体内を覗き見するというのも、江戸時代の視覚文化におけるオランダの望遠鏡の影響を示唆するものといえる。というのも望遠鏡が舶来し普及した後に、それは現実の世界で利用される一方で、数多くのフィクションにも登場し、日本の視覚表現を変えたといえるからである。たとえばオランダのレンズを膺にあてて、腹部を透視する医師の成功を語る『黄金山福蔵実記』(1778)、あるいは、のぞきからくりをもちい、腹を覗きながら人の心をうかがう『腹内窺機関』(1826)などは、フィクションのなかで望遠鏡を扱った黄表紙の代表的な作品である。『飲食養生鑑』と『房事養生鑑』でもレンズをとおして、肉眼では見えないものを可視化するといった、覗かれる側の視点のみから体内の働きが描かれている(スクリーチ, 1997)。つまりこれらの錦絵には、オランダのレンズがもたらした視覚変容の絵画化が反映されているのである。

これらの錦絵のもう一つの特徴として、『解体新書』がはじめて紹介した身体用語が使用されている点があげられる⁶⁾。たとえば『房事養生鑑』には卵管、卵巣、乳腺、あるいは心臓と肺臓が繋げて描かれており、『飲食養生鑑』には肝道が描かれている。これらの用語は、『解体新書』が出版された後に普及した知識だといえる。また『飲食養生鑑』の解説文にも「序云、凡、人間の貴人高位といふも下賤の身も、又賢も愚かなるも、はらの中にそなへたる臓腑此ごとし」と書いてあるように、体内には社会的な身分による差異はなく、みなが同じ構造をそなえていると理解される——これは「近代科学」的な捉え方だともいえよう。『解体新書』の出版により、

6) 酒井シヅ氏はこの二つの錦絵では解剖学の知識の影響も見られることをはじめて指摘した(酒井, 2003: 138-139)。

日本人の身体観は大きく変化したわけだが、それは『飲食養生鑑』および『房事養生鑑』からも理解しうるのである⁷⁾。

体内の働きに関する表現方法を考えてみると、まず思い浮かぶのが、ヨーロッパにおける近世哲学の祖として知られているルネ・デカルトの動物機械論である。デカルトは身体が物質であり、精密な機械であると理解したが、これと比べるならば、『飲食養生鑑』や『房事養生鑑』の作者も小人の働きのメタファーを使いながら、身体が機械のように作動するという近代的な考え方を主張していると解釈しうるのではないか。

問題となるのは、これらの錦絵を、当時の一般庶民がどのように捉えたのか、という点である。漢方医学と西洋医学を表現するこれらのイラストレーションは、人間の身体を生活風景に見立てながら、健康な食生活と性生活を啓蒙する役割を担っている。その錦絵には、ヨーロッパから伝えられた最新知識が織り込まれていたわけであるが、しかし当時の一般庶民はそれをどのくらい理解できたのだろうか。

ちなみに「小人」のイメージは、西洋のメディア文化でもレトリックを目的として昔からしばしば使われてきた。メディア考古学の研究者であるエルキ・フータモは「トボス」としての小人の役割について、それを「他文化の伝統に繋がりをつけるコネクター」であり、「文化を当たり前のものに、耳慣れないものをお馴染みのものに偽装する」と論じている（フータモ, 2015 : 32）。たとえば1950年代には、小人がパソコンとTVに住んでいるというような、一般に流通したイメージに影響を受けた広告がよく作られた。つまりそこでは、小人のイメージをもちいて当時としては先端的なテクノロジーを表現しようとしたのである。これは『飲食養生鑑』と『房事養生鑑』においても同様であり、両作品でも「小人」によって、オランダから伝えられた最新の医学知識が「翻訳」されている。

もう一つの解釈として指摘できるのは、小人の台詞や、体内の雰囲気から考えると、作成者が身体の様子を庶民に楽しんでもらうため、ユーモアあふれる娯楽的な作品を作った可能性である。しかし、そうであれば、なぜ一般の庶民が理解できない知識をわざわざ絵に入れる必要があったのだろうか。科学哲学史家のプリアン・バイグリが指摘するように、「すべての図・表は、イラストレーションとその利用者が共有する一連の約束事を必要とする記号化作業のようなものである。もし通用している約束事に利用者が馴染んでいなければ、その利便性は損なわれてしまう」⁸⁾。つま

7) 日本医師の身体観の変化については、Kuriyama (1992) を参照。

り、利用者が描かれているものを理解できないと、図像はそれを描いた人間の意図を伝えることができない。『房事養生鑑』に描かれている知識を考えると、19世紀前半に一般の庶民はどれほど卵管、卵巣、乳腺の働き（図9-1）を理解できたのか。難しい問題だが、このような解釈をめぐる問題は『飲食養生鑑』と『房事養生鑑』には限らない。人体血管図を描く石坂宗哲の『栄衛中経図』と、日本的発展を示す経絡図を考えると、これらの図の利用対象者と利用目的を明らかにすることは難しい。

3 石坂宗哲の『栄衛中経図』はどう理解されたのか

石坂宗哲（1770-1842）は針灸の近代化の端緒をひらいた人物で、オランダ東インド会社の出島商館医員として1822年6月に来日した蘭医フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトに針灸を伝えた人物として歴史に名を残している。石坂宗哲は漢方医学と西洋医学の間に挟まれた時代のなかで、針灸医学の立場から西洋医学の理解につとめた。たとえば『知要一言』では、鍼灸師が解剖医学の知識を学ぶ必要があると主張している。

曰解剖して、人身内外を委敷知は、其国の専務と承る。針制の法を行ふも、人身内外の諸器官能を委く知らされは、病を治するの工夫を得る事なし。徒に師伝を守るのみなり。⁹⁾

他方で『医源』では、『難経』と『脈経』の説を誤りとして批判し、その論拠を西洋医学に求めて、西洋医学でいうところの「神経」「動脈」「静脈」を、「内経」の「宗気」「榮」「衛」へと訳出することによって、オランダ医学の解剖学を援用しながら、新しい鍼灸医学観を構築した¹⁰⁾。つまり石坂宗哲は西洋医学、とりわけ解剖学によって、『黄帝内経』の経文を空理空論から救い、臨床に役立たせようと試みたのである。石坂宗哲によると、病気があるとき、的確な箇所を鍼を刺せば、その

8) “Every diagram is a kind of encoding that demands a set of conventions that are shared by the illustrations and the user. If the user is unfamiliar with the conventions at work, this compromises their utility.” (Baigrie, 1996 : 11) .

9) 石坂宗哲『知要一言』、写本、ライデン大学図書館所蔵（請求番号：UB1092）。



図 9-3 『栄衛中経図』
(ライデン大学図書館蔵)

刺されたところに反応が現れ、「元気」が集まることによって、「病邪」が除かれる。言い換えれば、宗哲の鍼術とは経絡理論にもとづかず、疼痛局所に近い考えだといえるだろう。

伝統的な経絡理論に依拠せず、西洋医学における解剖学の影響を受けた石坂宗哲の鍼術について、シーボルトは強い関心を抱いていた¹¹⁾。彼がオランダに持ち帰った文献は、医学書 14 点のうち 7 点は鍼灸に関する文献で、そのなかでも 5 点が石坂宗哲による鍼灸書であった¹²⁾。

そのうちの 1 点が『栄衛中経図』である (図 9-3)。『栄衛中経図』は文政 8 年 (1825 年) に刊行され、吉田秀哲 (石坂宗哲の孫にあたる) によって描かれた大型の人体血管図と、石坂宗哲によるその解説である。イラストレーションの出典は明記されていないが、おそらく、オランダのヨーハン・バルヘインによる『人体解剖学書』(1783 年) を参照しながら作成されたのではないと思われる (西川, 2005 : 263)。

- 10) 『医源』には「心蔵出納血脉之謂栄衛。榮動而出。行脉中循循乎。脉脉動而不居也。有経絡別絡孫絡支絡細絡。由内達乎。解剖家目曰動脈者之也。衛不動而入。行脉外。其行有節。亦有経絡別絡孫絡支絡細絡。由外入乎内。解剖家目曰静脈者是也」と書いてある (石坂, 1990 : 427)。
- 11) 日本に滞在した時に、シーボルトは自分自身で鍼術を体験した。たとえば『バタヴィア学芸協会雑誌』第 14 号、石坂宗哲の鍼術についての初回論文においてシーボルトはつぎのようにいう——「私が私自身に行った試みによると、注意深い鍼はほとんどまったく痛みを起さず、炎症も他の症状もひき起こさなかった」Von Siebold (1833 : 388-389 ; 1897 : 81-82)。
- 12) 7 点の鍼灸書は『鍼灸拔萃大成』、『鍼灸広狹神俱集』、『鍼灸説約』、『栄衛中経図』、『知要一言』、『九鍼略説』、『鍼灸図解』。岡本一抱著『鍼灸拔萃大成』と『鍼灸図解』以外はすべて石坂宗哲によるものである。ライデン大学図書館のシーボルトコレクションでは鍼灸関係ではない他の医学書の 7 点は『広参説』、『薬名称呼』、『人面瘡図説』、『解臟図賦』、『和蘭全軀内外分図』、『薬品応手録』、『婦人患病書』である。

解説文では、西洋医学でいうところの「動脈」と「静脈」を、「内経」の「榮」と「衛」に同一視しようとしている。イラストレーションをみるだけでも、シーボルトなどオランダ医学につうじる当時の人はそれを理解できただろう。また解説文のみを読むだけでも、漢方医学の古典につうじる当時の人はそれを理解できただろう。問題は、解説文を読みながら、イラストレーションを理解しようとする場合である。オランダ医学の解剖学的な知識を援用しながら、新しい鍼灸医学観を構築した石坂宗哲の視点から考えると、『栄衛中経図』を作成した目的は明らかである。しかしその一方で、読者の視点からこのイラストレーションが果たす役割と、その具体的な利用について明らかにすることは難しい。このイラストレーションにはヴィジュアル的なインパクトはあるが、シーボルトあるいは石坂宗哲の弟子の他にどのくらいの当時の人が解説文を読みながら、このイラストレーションを理解したのだろうか。

4 経絡図・銅人形の日本の発展とその役割

石坂宗哲が活躍したのは、日本の医師がオランダ医学に強い関心をもちはじめ、漢・蘭医学の折衷を図ろうとした画期的な時代であった。それ以前の時代の伝統的な経絡図についても、イラストレーターの意図を理解しにくい例も少なくない。長野仁がすでに述べたように、17 世紀になると滑伯仁の『十四経發揮』が日本で普及し、それによって鍼灸師による経絡と経穴の研究が本格的に開始される。その展開の一つは、作法・画法による体内の経絡の関係の複雑化、および図案化である。それは、いわゆる「日本の発展」をみせたといっていだろう (長野, 2001)。

中国の伝統的な経絡図は、重要な経絡ルート (12 本もしくは 14 本) と、経絡に属するツボの位置しか描いていない。これに対して日本では、重要な経絡のほかに、体内における経絡の様子 (臓腑に属絡経脈のルートと、交会穴) も腹部に描かれている。『はりきゅうミュージアム Vol.1 銅人形明堂図篇』(長野, 2001) に紹介されている『西川印 経絡図』、『童顔経絡図』などをみると、イラストレーションにより明確になるはずの経絡ルートは、むしろ逆効果で判読しにくくなる。

経絡図の他に、経絡図の日本の発展におけるもう一つの表現媒体となるのは、和製の銅人形である。元禄期に出版された『人倫訓蒙図彙』には「銅人形師」という職人が紹介され、また、オランダの医師ウィルレム・テン・ライネ¹³⁾の『関節炎に関する論文・鍼術について』(1682) にも、和製の小型銅人形が日本で流行して

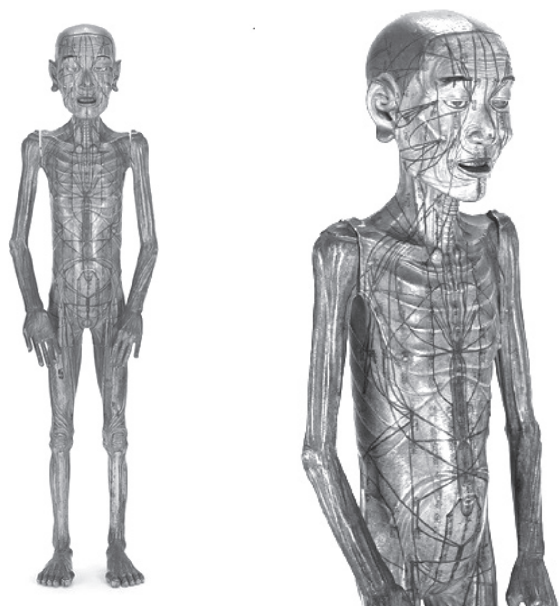


図9-4 和製の銅人形（四国医療専門学校蔵）

おり、鍼灸師の家の前に、その宣伝のために銅人形が置かれていると書かれている¹⁴⁾。当該論文には、系譜の違う経絡図が4枚（2人分の正・背面図）挿入されているが、そのうち1枚は、ある男性（前面）の腹部に「交会穴」が表されているので、おそらく和製の経絡図を使ってそれを描いたのではないかとと思われる（Vigouroux, 2019: 163-173）。いずれにしても、このような日本の発展を示す経絡図・銅人形が当時の社会で普及していたことは間違いない。問題となるのは、このような、一目で判読することが難しい経絡図・銅人形が実際にどう活用されたのだろうか、という点である。もしそれが私塾で教材として活用されたのであれば、塾生はカリキュラムにおけるいかなる段階でこのような知識を学んだのであろうか。私塾の教師は、たとえば銅人形を指さすなどしながら、口頭で経絡の表面・体内のルートを説明したのだろうか。あるいは、塾生は記憶用の補助教材として、経絡のルートを暗記するため、このような視覚的な媒体を使用したのだろうか。

13) 1674-76年の間長崎に滞在した。

14) 正宗（1928: 190）、Rhijne（1683: 180）、Vigouroux（2015）を参照。

5 結びにかえて

以上に述べてきたように、日中欧の医学交流から考えると、江戸期には出版の発展により言語情報だけで説明が困難な医学内容（中国医学あるいは西洋医学）が図・人形などのイメージをつうじて伝達されるようになった。しかし本章でみてきたように、現存するイラストレーションからイラストレーターの意図と、読者の視点からこれらの視覚的資料を考えることは難しい。江戸時代の医学が表現媒体である図、人形、身ぶり（身体的感覚）によっていかに表現され、伝達され、理解されたか——これは今後も重要な研究課題になるのではないかと考えられる。

【引用・参考文献】

石坂宗哲『知要一言』、写本、ライデン大学図書館所蔵（請求番号：UB1092）

石坂宗哲（1990）.『医源』臨床鍼灸古典全書第16巻、オリエント出版社

小曾戸洋（1999）.『漢方の歴史』大修館書店

酒井シヅ（1999）.『解体新書』『クリニシアン』42(437)

酒井シヅ（2003）.『絵で読む江戸の病と養生』講談社

白杉悦雄（2006）.『江戸の体内想像図——『飲食養生鑑』と『房事養生鑑』』『解剖学雑誌』81(1)

スクリーチ, T. / 高山 宏 [訳]（1997）.『江戸の身体を開く』作品社

長野 仁（2001）.『はりきゅうミュージアム——銅人形・明堂図篇』森ノ宮医療学園出版部

西川輝照（2005）.『榮衛中経図の展示記録』『名古屋大学博物館報告』21

畑 有紀（2015）.『江戸後期文芸作品をめぐる食と養生』名古屋大学、博士論文

フータモ, E. / 太田純貴 [編訳]（2015）.『メディア考古学』NTT出版

正宗敦夫 [編]（1928）.『人倫訓蒙図彙』日本古典全集、日本古典全集刊行会

Baigrie, B.（1996）. *Picturing knowledge*. Toronto: University of Toronto Press.

Kuriyama, S.（1992）. Between mind and eye: Japanese anatomy in the eighteenth century. in C. Leslie, & A. Young, *Paths to Asian medical knowledge*. Berkeley: Univ. of California Press, 21-43.

Kuriyama, S.（2001）. The imagination of the body and the history of embodied experience: The case of Chinese views of the viscera, in S. Kuriyama (ed.), *The imagination of the body and the history of bodily experience*. Kyoto: International Research Center for Japanese Studies, 17-29.

Kusukawa, S.（2012）. *Picturing the Book of Nature*. Chicago: University of Chicago Press.

Lo, V., & Barret, P（2018）. *Imagining Chinese Medicine*. Leiden: Brill.

- Ogilvie, B. (2003). Image and Text in Natural History, 1500–1700, in W. Lefèvre, J. Renn, & U. Schoepflin, *The Power of Images in Early Modern Science*. Basel: Birkhäuser.
- Rhijne, W. T. (1683). *Dissertatio de arthritide: Mantissa schematica de acupunctura et orationes tres de chymiae et botaniae antiquitate et dignitate, de physionomia et de monstis*. London, The Hague, Leipzig, 180.
- Vigouroux, M. (2015). The Reception of the Circulation Tracts Theory into Japan (600–1868), in B. Elman (ed), *Antiquarianism, Language, and Medical Philology*. Leiden: Brill, 105–132.
- Vigouroux, M. (2019). Transmettre quels savoirs? Le rôle des illustrations des vaisseaux d'acupuncture dans la circulation des savoirs médicaux entre l'Asie orientale et l'Europe au dix-septième siècle, *Eurasie*. Paris: L'Harmattan, 155–192.
- Von Siebold, P. F. (1897). *Iets over de Acupunctuur (naaldensteekkunde)*. *Verhandelingen van het Bataviaasch Genootschap van der Konsten en Wetenschappen*. Batavia, Der Lands Drukkerij.
- Von Siebold P. F. (1897). *Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern Jezo mit den südlichen Kurilen, Sachalin, Korea und den Liukiu-Inseln*. Würzburg und Leipzig, Leo Woerl.
- Whiteley, R. (2018). Figuring Pictures and Picturing Figures: Images of the Pregnant Body and the Unborn Child in England, 1540-c.1680, *Social History of Medicine*. <<https://doi.org/10.1093/shm/hkx082>>. (Accessed 4 June 2021)).
- Wolfgang, M.-Z. (2010). 'Inner Landscapes' - Japan's Reception of Western Conceptions of the Body. <<http://www.fcv.ne.jp/~michel/publ/books/48/048-english.html>>. (Accessed 4 June 2021)).

10

近藤勇と関羽

幕末の剣豪と「三国志」の出会い

伊藤 晋太郎

1 はじめに：関羽に心酔していた近藤勇

関羽（?-219）といえば、「三国志」を代表する武将の1人であり、三国の一つである蜀（221–263）を建国する劉備（161–223）と強いきずなで結ばれ、弟分の張飛（?-221）とともに、劉備を忠義と武勇で支えた人物として知られる。とくに武勇は1人で1万人の敵を相手にできると恐れられた。美しい長いひげの持ち主としても有名である。

この関羽にはもう一つの顔がある。それは神としての関羽である。中国において関羽は死後に神格化され、朝廷も民衆も宗教勢力もそれぞれの需要に応じて信仰の対象とした。清代（1636–1912）には各地に関羽をまつる廟を設けることが義務づけられる。そう、日本の横浜や神戸の中華街にもある関帝廟である。「関帝」とは神格化された関羽の称号である。

関帝廟に限らず、関帝信仰は日本にも入っており、江戸時代には関羽は有名であった。そんな関羽に心酔した1人に近藤勇（1834–1868）がいる。いうまでもなく、幕末の京都で治安維持に奔走した新選組の局長である。

近藤は武蔵国多摩郡の豪農・宮川久次郎（1798–1886）の三男として生まれた。もとの名を勝五郎または勝太という。剣術道場・試衛館を開いていた天然理心流の宗家・近藤周助（1792–1867）の養子に迎えられ、名を近藤勇と改めて天然理心流の宗家を継ぐ。文久3年（1863）、第14代将軍・徳川家茂（1846–1866）の上洛に際し、その警護のために浪士組が組織されると、門人の土方歳三（1835–1869）・沖田総司（1844–1868）らとともに参加する。その後、京において攘夷派の不逞浪士取り締まりをになう新選組の局長となり、池田屋事件・禁門の変（ともに1864年）などで活躍して一躍名をはせる。しかし、鳥羽・伏見の戦い（1868年）で旧幕軍が新政府軍